第六章　わたしが恋人になれるわけないじゃん、ムリムリ！（※ムリじゃなかった！）

第六章 我怎么可能成为你的恋人，不行不行！（※不是不可能！？）

#ステージに向かいながら、思う。

#

#　もし本当に、誰からも嫌われない方法があるとしたら、それはひとつだけ。

#『普通』になることだ。

#　好きなものも一緒、嫌いなものも一緒。なにもかもみんなと一緒になれば、周りから叩かれることはなくなる。無敵のバリアの完成だ。

#　わたしはみんなと一緒になりたかった。ぜんぶ人に合わせて、そうして『普通』になりたかった。真人間になりたかった。量産型女子になりたかった。

#　そのために、外ではゲーム好きって言わないようにした。ＦＰＳにドハマリしている女子高生は、普通じゃないから。

#　普通の子がどんなものに興味をもっているのか調べて、ちゃんとわたしも普通のことを好きになろうとがんばった。

#　世間の輪から外れないように、毎日すごく気をつけて行動していた。まあ、中身がわたしだから、あんまりうまくいかないことも多かったけど……でも、心がけてはいた。

#『どこにでもいる普通の女の子』なんて、わたしにとってはめちゃめちゃめ言葉だった。

#　クラスの人気者になんてなれなくてもいい。ただ、誰にも嫌われないような、普通の子になりたかった。

#

#　入学式に話しかけたは、『特別』な女の子だった。

#　特別っていうのは、普通の上位存在だ。

#　特別な人は、ずば抜けた長所だったり、華があるからこそ、誰にも嫌われることはない。あるいは人に嫌われたって、気にせずにいられる。嫌っている側の方がミジメになってくるような、そんなキラキラな存在が、特別だ。

#　ナンバーワン。あるいはオンリーワン。わたしは王塚真唯の後ろをくっついて回る普通の女の子として、うまく学園生活を送っていた。そのつもりだった。

#　なのに、わたしは間違えた。

#　六月の晴れた日に、屋上へと逃げ出した。

#　普通になりきることができなかった。

#　特別が普通の上位存在なら、普通にもなれないやつは？

#　決まっている。落ちこぼれだ。

#　それなのに真唯はわたしの本当の姿を見ても、わたしのことを特別だと思っていてくれた。

#　ふたりだけの秘密の関係が始まる。わたしは気分がよかった。

#　真唯に特別扱いされると、自分がなにも成長していないのに、われた気がした。本当は普通にもなれない落ちこぼれのくせに。

#『親友』って言葉をにして、を隠そうと必死だった。

#　だって、女同士で付き合うなんて、そんなの普通じゃない。恋人が芸能人だなんて、普通じゃない。わたしがあんなすごい人にアプローチされるなんて、普通じゃない。ありえない。

#　れながらすがりついた『普通』って名前のを、わたしは手放すことができなかった。

#　わたしは弱くて、独りじゃ泳げないから。

#　真唯のグループはみんな、特別な女の子だ。わたしにはない輝きがあって、ここじゃないどこかを目指している。さんも、さんも、ちゃんも、みんなすごい。

#　人に嫌われたくなくてえているのは、きっと、わたしひとり。めな気持ちをえながら、卑屈な笑みを浮かべていた。

#　ずっと。

#

#　でもね。

#　もし、やり直せるのなら。

#　あの日のわたしが、暗い部屋の中で、スマホの画面に映った陽キャにれて、光を目指したみたいに。

#　いつだって、きょうこの日から、新しい自分に手を伸ばすことが許されるのなら。

#

#　今度は――――。

#

#　真唯に、言わなくちゃいけないことがあるんだ。

#　わたしはゆっくりと壇上にあがってゆく。

#　行こう、真唯のもとに。

#

#　このステージが、わたしのステージだ。

#

#＊＊＊

＊＊＊

#

初翻：夜夜

#「真唯」

「真唯」

#　裏手から回り込んできたイベントステージ。スポットライトの光は、体を串刺しにするみたいに鋭い。メインステージだけあって、観客の数はさらに多かった。

#　並ぶ三人のコスプレイヤー。真正面に王塚真唯。後ろには紫陽花さんがいて、わたしはふたりに挟まれるようにして、おこがましくもセンターに立っていた。

#『紹介しよう。彼女たちは私の友人の紫陽花と、そしてれな子だ』

#　真唯が観客になにかを告げると、大きな拍手が巻き起こる。ステージの上で聞くと、まるで地面が揺れるような震動が伝わってきた。正直めっちゃビビる。

#　でも、今のわたしはどうやら、思ったよりは平気そう。

#　たぶん、もう頭ではなにも考えていないから。（威張れることではない）

#　真唯だけをじっと、見つめていた。

#『それでは早速、最初のコーナーだ。ゲストに質問ということだけれど、そうだね、ふたりがまず私になにか聞きたいことがあれば』

#　真唯がなにを言っているのか、半分ぐらい聞き逃しながらも、口を開く。

#「どうして、遊園地に来なかったの？」

#　マイクを手渡してこようとしていた真唯の手が、止まる。

#　真唯は少し迷った後に、マイクを使わず、肉声で言葉を返してきた。

#「言ったじゃないか、あの日は、仕事が入ってしまって」

#「私が紫陽花さんの告白に、返事をしちゃったから？」

#「もうふたつ目の質問かい？　ペースが速いね」

#「でも、言ったよね。あれは違うって。それなのにどうして真唯が勝手に決めちゃうの……」

#　客席がざわめく。

#　わたしたちの声は、ほとんど届いていないんだろう。これもなにかの演出かな、と首をひねる人たちの前で、わたしはさらに真唯を問いただす。

#「わたしはちゃんと、真剣に考えるって言った。そりゃ、こんなわたしだから、真唯のことをものすごく不安にさせちゃったかもしれないけど……でも……」

#「私は不安になんて思っていない。王塚真唯がそんな感情を抱くはずがないだろう」

#　超然と微笑む真唯。

#　そこで、後ろから紫陽花さんが声を添えてきた。

#「そうだよ、れなちゃんも悪いんだから」

#「えっ？」

#「真唯ちゃんは、すごく不安がってた。だから、いっぱい、よくないことを考えちゃっていたんだよ。真唯ちゃんだって、悩んでいたんだから」

#「そう、だったんだ」

#　ズキリ、と胸が痛む。

#　そうだ、ほんとは知っていたはずなのに。真唯だってちゃんと傷つくんだって。

#　わたしが、ずっと自分のことしか考えていなかったから。

#　真唯はまだ微笑んでいる。だけど、徐々にその瞳が真剣さを帯びてきた。

#「紫陽花。なにもこんなところで、その話をすることはないだろう。今は、お仕事中なんだ。また今度に」

#　確かに、今はステージの最中だ。真唯はイベントを成功させなければならない。あとほんの少しだけ時間をもらえたら、だなんて、無理なお願いだろう。

#　でも、どうしてだろう。今このときを逃したら、真唯はもうわたしと言葉を交わしてくれない。そんな予感がして、だからわたしは、迷って。

#　直後、客席から声があがった。

#「どうやら今！　マイクの不調みたいで！　もう少々！　お待ちくださいって！　王塚真唯さんが！　言ってます！」

#　まるで会場に響き渡るような大声で、びっくりした。

#　さらにもうひとつびっくりしたのは、それを叫んだのが、紗月さんだったことだ。

#　え、なんで紗月さんが……？　そんなことを、してくれるの？

#「紗月……」

#　真唯がさすがに表情を崩した。眉根を寄せる真唯。そこに重ねて、今度は香穂ちゃんが「だそうですー！」とめいっぱい叫んで、げほげほとをしていた。

#　紗月さんと視線が合う。その目は、もう私はやるだけのことはやったからあとは好きにしなさい、とでも言うようだった。わたしは握った拳に力を込める。

#　真唯はまるで追い詰められたみたいに、苦々しくつぶやく。

#「どうしてこんなことを」

#「みんな、真唯ちゃんの幸せを願っているんだよ。私たちだけじゃない。会場にいる、真唯ちゃんのファンの人も、みんな。だから、それをわかってほしくて」

#　紫陽花さんの言葉を、まるで拒絶するように真唯が首を横に振る。

#「さすがにこれは、余計なお世話だ。紫陽花、君のお節介がそんなにも行き過ぎているとは、思わなかった」

#「今は、なんて言ってもらってもいいよ。でも、私は真唯ちゃんに逃げてほしくない」

#「私が逃げるなんて」

#　わたしは。

#　一歩、真唯に歩み寄った。

#「真唯は、わたしが紫陽花さんと付き合った方が、いいの？」

#　その瞬間、真唯の顔がくしゃりとんだ。

#　決定的なのような言葉。

#「それは……ああ、もちろんだ。紫陽花は私よりもずっと優しくて、素敵な女の子だ。君のことを、きっと幸せにしてくれる。君たちふたりが付き合うべきだ」

#「真唯ちゃん！」

#　駆け寄ろうとした紫陽花さんを、わたしは手で制した。

#　軽く目をつむる。

#　ああ、ドキドキする。

#　付き合うってことは、その人の、人生を背負うってこと。

#　真唯でも、紫陽花さんでも、その一分一秒は、とんでもなく貴重なもので。

#　それはわたしなんかのために使われちゃいけないって、ずっと思っていた。

#　逃げてたんだ、わたしには、そんな価値なんてないって。

#　でも、違うよね。

#　心を砕いてくれた優しいふたりに、わたしが似合わないっていうんならさ。それでわたしが断って、ふたりが悲しい顔をするぐらいならさ。簡単なことじゃん。

#　ふたりのために、なにができるのか。それは――。

#　似合うようにならなくっちゃいけなかったんだ。わたしは。

#　告白っていうのは、そのための決意の儀式なんだ。

#「わたしも、紫陽花さんのことが、好きだよ。告白してもらって、ちゃんとわかった。紫陽花さんはわたしにはもったいないけど……でも、紫陽花さんと一緒にいるのはすごく楽しかったし、紫陽花さんと話していると、ドキドキするの」

#　その言葉に、どうしてか、紫陽花さんは口を押さえて悲しそうな顔をした。

#「そうか、だったら！」

#「うん、だから」

#　大きく息を吸う。

#　一度、真唯の手を引いて、プールに飛び込んだことがあった。

#　あのときの勇気は、わたしの人生においても相当な分を振り絞った。れな子の三年分ぐらいを一気に消費したかもしれない。

#　だったら。

#　この瞬間のわたしは、きっと、これからの人生の分を、勇気をすべて使い切ってしまうのだろう。

#　真唯をまっすぐに見つめて、告げる。

#　あの夏の日の答えを。

#

#「わたし、紫陽花さんと付き合うね」

#

#　勇気を。

#　紫陽花さんが小さな声で「どうして……」とつぶやいた。

#　なのに真唯は、どこか救われたような顔をする。

#「ああ、そうか」

#　まるっきり正反対のふたり。明と暗。できの悪いコラージュみたいに、真唯と紫陽花さんのするべき表情は、ちぐはぐだった。

#「よかった。これで、私は王塚真唯のままで、いられる」

#「ねえ、れなちゃん、どうして」

#　紫陽花さんがわたしの腕を摑む。

#　そんな風に、すごく優しいからだよ、紫陽花さん。

#　自分が報われたことよりも、真唯が傷ついてしまったことを悲しんでしまう。そんな紫陽花さんがいてくれたから、わたしは学校生活が楽しかったんだ。

#　でもそれは、真唯もだ。

#　微笑んでいる真唯を見つめる。

#　いつもわたしのために心を尽くしてくれた真唯。太陽みたいに、わたしのことを照らしてくれた。足元を、自分の濃い影ばっかり見ていたわたしは、ずっと恩知らずだったね。

#　わたしは、ふたりのことが大好きだ。

#　だから、わたしは。

#　わたしは――。

#

#「そして、真唯とも付き合う！」

#

#　――普通なんて、もういらない！

#

#

#「………………は？」

#「え………………？」

#　痛い。

#　沈黙が、肌にぷすぷすとマチ針みたいに突き刺さっている。

#　すごく、ものすごくふたりの顔を見たくない……。今の言葉で、一生分の勇気が尽き果ててしまった……。そこにないならありませんね、勇気……。

#　ただ、これだけ告げて『それじゃあわたしはこれで！』と会場を去って学校の屋上から飛び降りたところで、翌日のニュースで取り上げられるだけなので、わたしはここから先もらなければならない……。口なんてなければよかったのに、人間……。

#「紫陽花さんと付き合って、真唯とも付き合う！」

#　繰り返した言葉には、なにも新しい情報がなかった。しいて言えば、わたしのの皮に書かれた『クズ！』というワードを太い油性ペンでなぞった程度。

#　幻聴だといいんだけど、客席から紗月さんのマジなトーンの「ゴミ……」という感想が飛んできた。八方ふさがりだ。

#　いや、まだだ。まだわたしには口がある。人類最古のは、言葉だ！

#「わたしは、紫陽花さんが好き！　さっき言った通り、ずっと紫陽花さんのことが好きでした！　これが恋だとは思わなかったけど、でも思い出せば最初から恋だったような気もするし、紫陽花さんを見ていると大体いつもドキドキしてたし！　好きです紫陽花さん！」

#「う、うん…………」

#　紫陽花さんはわたしの言葉の真意を受け止めきれず、っていた。そりゃそうだ。ドン引きされていないだけマシ。されているかもだけど！

#「そして！　わたしは真唯も好きだ！　屋上で真唯に助けてもらったときから、きっと真唯にかれていたんだと思う！　だって真唯に押し倒されたときもそんなに嫌じゃなかったし！　意地張っててごめんなさい！　真唯のことが好きでした！」

#「あ、ああ…………」

#　言葉の勢いに押されたように、真唯がこくこくとうなずいていた。王塚真唯の貴重な絶句シーンである。

#　人類最古の叡智である言葉は、これまでにおびただしいまでの戦争を引き起こしてきたきっかけでもあったのだということを、わたしはこの日、再認識した。

#　いやいや！　まだめないよ！

#「普通はこういうとき、ちゃんとどっちかを選んで、どっちかにごめんなさいをするべきなんだと思う。っていうか、わたしも本当はそのつもりだったんだ。でも、そんな、自分がフラれることなんて当たり前って顔をしている真唯に、じゃあ紫陽花さんと付き合うね、なんてぜったいに言いたくないので……」

#「君は、なにを」

#「紫陽花さんだって、おんなじ！　優しすぎるから、自分が選ばれることより、真唯がフラれちゃうことにばっかり、気を取られていたんじゃないんですか!?　違ったらすみません！　わたしは紫陽花さんのことを何も知らないので……でも、そうだったら、そうだと言って！」

#「それは……」

#　紫陽花さんは唇に指を当てて、目をそらした。『そうだよｗ　途中かられなちゃんのこととか、どうでもよかったｗ』とは言ってくれなかった。よかったね。よかったねじゃねえわ。

#「だからわたしは『普通』なんて、いらない」

#　胸に手を当てて、宣言する。

#「どっちのことも選ばないんじゃない。ちゃんと、ふたりとも選ぶ。すごくなのはわかってる。けど、わたしは、真唯と、紫陽花さん。ふたりと、ひとりひとりと付き合いたい」

#　わたしの言葉に、ふたりは――。

#「…………真唯ちゃん」

#「紫陽花……」

#　お互いどうしよう、とでも相談するかのように、視線を交わしていた。

#　なんだか、バンザーイ三人で一緒だねやったねー！　ってテンションじゃないんですが！

#「ねえ、れなちゃん」

#　わたしの目を見つめながら、紫陽花さんが口を開く。息が詰まりそうなほど、強い視線だ。

#「れなちゃんがね、私たちのことを考えてくれているのはね、わかるよ。ありがとう。でもね、それならやっぱり、私よりも……」

#「待ってくれ、紫陽花」

#　真唯が紫陽花さんの手首を摑んで、その言葉を途中でった。

#「そこから先を言うのは、私が許さない。君は幸せになるべき女性なんだ、紫陽花」

#「真唯ちゃん……」

#　再びふたりが、見つめ合って。

#「だから！　そういうんじゃないから！」

#　わたしは無作法にも、ふたりの間に割って入った。

#「言いたいことが、なにも伝わってない！　違うの！　わたしが、ふたりと付き合いたいの！　ふたりの気持ちなんて関係ない！　わたしが、願って、望んで、ふたりの手を取りたいの！」

#　真唯の手と、そして紫陽花さんの手を、がっしりと摑む。

#　ふたりの圧倒的美貌を誇る顔面が、すぐ目の前にあって、思わず謝ってしまいそうになる。

#　わたしなんかが釣り合うはずがないと、この手を離してしまいそうになる。でもそれじゃ、今までと同じことの繰り返しなんだ。

#　この場を収めるための場当たり的なじゃなくて、ちゃんとわたしは覚悟を示さなきゃいけない。信じてもらえるように、ちゃんと。

#「ねえ、もしも……わたしが真唯と付き合ったら、紫陽花さんは、どうするの？」

#「えっ……そ、それは……」

#　紫陽花さんの視線が揺れる。

#「ふたりのこと、ちゃんと、応援する、よ」

#　涙目になっている！

#「やだ！　そんなのやだ！　わたし、紫陽花さんとちゃんとデートの続き、したいもん！」

#「デートの続きって、それ……えっ、あの、観覧車の……？」

#　紫陽花さんの顔がみるみるうちに赤くなってゆく。わたしはブンブンとうなずいた。うなずきながら、わたしはなんてことを叫んでしまったんだと背中に汗かいてきた。これじゃ紫陽花さんとただキスしたいですって言っているだけじゃん……。

#　いや、したいかしたくないかで言うとそりゃ、その……その、アレですけども！

#「真唯は!?　真唯は、わたしが紫陽花さんと付き合ったら!?」

#「フランスに留学して、遠い空の下から君たちの幸せを願おうと」

#「なに言ってんの!?　それこそぜったいダメでしょ！　ちょっと待ってよ、そんなことしようとしてたの!?　えっ、紫陽花さんも啞然としているじゃん！」

#「……真唯ちゃん……？」

#　真唯は冗談でもなんでもないような口ぶりで、小さくうなずいた。

#「私が近くにいると、紫陽花も不安になるだろう。いつれな子がまた私に振り向いてしまうか、わからない。それなら、距離を置くのがお互いにとっても有益だ」

#「理由はメチャクチャ真唯らしいけども！　嫌だよ！　わたし、真唯と離れたくない！」

#　を繫ぎ止めるみたいに、結んだ手に力を込める。

#「真唯のこと、好きだから……」

#「でも君は紫陽花が」

#「紫陽花さんのことも好きだけど！」

#　わたしは完全に開き直っていた。

#「ふたりは優しすぎるから、そうやってお互い身を引こうとしちゃうんだけどさ。だめだよ。だってわたしは、すっかりその気になったんだから。わたしは自分のことで精一杯だから、自分の幸せしか願えないの！　ふたりが付き合ってくれないと、わたしは悲しいよ！」

#「れなちゃん……なあに、それ……」

#　あまりにも必死なわたしを見て、紫陽花さんがくしゃっとした顔で、笑ってくれた。

#「だって、二股だよ……？」

#「……そうですね」

#　わたしは神妙にうなずいた。そう、世間ではわたしの行為を二股って呼ぶらしい。そして一般的には最低の行いと言われている。した人は、たまに刺されたりしてるらしい。怖い。

#　紫陽花さんはを落ち着かせるみたいに、胸の辺りを撫で回す。

#「私、初めての恋人に、二股された状態からスタートとか、そんなの、びっくりだよ」

#「そうですね………………長い人生、そういうこともある、ということで…………」

#　やばいな。喋れば喋るほど、わたしがとんでもないことを言っている気がしてきた。紫陽花さんを相手に二股？　そんなやつ今すぐブラックホールに飛び込めばいいんじゃないかな。

#　くじけるな、心。冷静になるな、頭……。どんなに道徳観に追いつめられようと、この手のぬくもりを思い出すんだ。

#「でもね、これは真唯には今までさんっざん言ってきて、一度も信じてもらえなかったんだけどさ。わたしって真唯に会う前は、同性同士で付き合うことだって、普通じゃなかったんだよ。それをムリヤリ、変えられちゃったんだ」

#「そうだったのか」

#　真唯は今初めて聞いたことのように、驚いていた。おい。

#「だからね、だったら、どうしてわたしだけ一対一で付き合うっていう普通に縛られてなきゃいけないのかな、って。今度はそっちがわたしに合わせてほしい」

#『……………………』

#　この強引すぎる論理に、真唯と紫陽花さんはまたしても押し黙った。

#　うん……うん。

#　おかしいな……。告白されて、選ぶ側だったのはわたしのはずなのに、なぜだろう。わたしのほうがふたりに『待って！　捨てないで！』って、すがりついているみたいだ。

#　沈黙を破ったのは、紫陽花さんだった。

#「ね」

#　紫陽花さんが、真唯に困ったような笑顔を向ける。

#「どうしよ、真唯ちゃん……こうなったらもう、ふたりで、付き合っちゃう？」

#「私と紫陽花で、か……。それは、なるほど」

#「待って！　捨てないで！」

#　わたしはすがりつく。

#　ここで独りにされたら、もう生きてく自信がない！

#「幸せにするから！　ふたりのこと、ぜったい幸せにするから！」

#　その場にひざまずいて、ふたりの手を取る。鏡写しの香穂ちゃんに説教していた偉そうな女のなんて、一個もない。それはまるで、めちゃめちゃ浮気者の騎士みたいだった。

#「だったら三年間！　高校卒業まで、わたしと付き合ってよ！　終わる頃には、わたしと付き合ってよかったって、そう思わせるから！　ふたりのこと、メロメロにしてみせるから！」

#　ただ叫ぶ。

#「もう、どうしてわたしなんかが、なんて言わない！　ふたりに好きって言ってもらったことを疑わないよ！　ふたりにずっと好きでいてもらえるように、努力するから！　お似合いの恋人になってみせる！　だから、だから………………」

#　急に涙があふれてきて、言葉に詰まる。

#　だって、わたしの言葉にはなんの根拠もない。

#　わたしがふたりのことを好きなのは事実で、ふたりと付き合いたいのも事実。だけど、ふたりを幸せにできるかどうかは、わたし次第だ。

#　保証もない。約束もできない。こんな言葉を信じろだなんて、虫が良すぎる。

#　それでもわたしは、信じてほしかった。ふたりには信じてほしい。そうしたらきっと、できる気がするから。

#「わたしと、付き合ってください、真唯、紫陽花さん……。ふたりのこと、ちゃんと幸せにしてみせるから……。だってわたし、ふたりのことが、大好きだから……」

#　子供が駄々をこねるような、かっこ悪い告白だ。

#　わたしは、ぜんぶをさらけ出した。

#　これからの未来。わたしたちが……ううん、少なくともわたしがいちばん幸せになる世界を、示した。これがわたしの、普通じゃない好きの形なんだ。

#　後はもう、ふたり次第。

#「意地悪なことを言って、ごめんね、れなちゃん」

#　紫陽花さんに、頭を抱かれた。

#　まるでわたしの涙を隠すみたいに。

#「ううん、そんな、言いたくなるのだって、当たり前だよ。わたし、ふたりにすごいこと言っているもん……」

#「……私はね、やっぱり、まだ戸惑ってる。こんな形、ぜんぜん想像してなかったから。本当にこれでみんな幸せになれるのかな、って疑っても、いるの。今よりもっと、つらいことになったり、悲しいことが起きたり、するんじゃないかな、って」

#「うん……」

#　みんなが見守っているステージの上。

#　光の世界で、でもね、と紫陽花さんが口を開く。

#「どうなるかわからないことに、一歩を踏み出したのは、私だから。それなのに、れなちゃんが勇気を出して言ってくれたことを、頭ごなしに否定は、したくないんだ」

#　紫陽花さんを見上げる。

#　優しい微笑みがあった。

#「だってれなちゃんは、言ってくれてたんだもんね。ずっと三人で、遊びたい、って」

#　言ったような、気がする。

#　三人で過ごした夏休みが、あんまりにも楽しくて。

#　紫陽花さんも、覚えていてくれたんだ。

#「わがままで、怒りん坊な私だけど、れなちゃんのこと大好きだから……」

#　温かな雨のような、紫陽花さんの声。

#「紫陽花さん……？」

#　わたしは、息を呑む。

#「とりあえずは、高校卒業まで、かな？　ふふ、こちらこそ、よろしくお願いします」

#「え、じゃあ、その……」

#　わたしはゆっくりと立ち上がる。紫陽花さんと視線を合わせる。繫いだ手を、紫陽花さんが結び直してくる。それは恋人つなぎだった。

#　クラスの人気者で、ずっとわたしの憧れだった、紫陽花さん。

#　紫陽花さんは、はにかむ。

#「デートの続き、しようね。今度ね」

#　今、この瞬間から。

#　紫陽花さんは、わたしの恋人になった。

#　頭がくらくらして、倒れそう。あるいは今すぐステージを走り回りたくなる。

#「ありがとう、紫陽花さん、ありがとう！」

#「きゃっ」

#　力いっぱい抱きしめると、紫陽花さんのかわいらしい悲鳴が聞こえてきた。おっと、衣装を汚しちゃいけないから。わたしはお行儀よく、元の位置に戻る。

#　らなくてもいい。これからいくらでも、こういうことをしていけるんだ……いや、こういうことってどういうことかはわからないけど。っていうかそもそもまだ終わってない！

#　もうひとり。わたしに告白された女の子がいる。

#　彼女からもちゃんと、返事を聞かせてもらわないと。

#　ぐしぐしと涙をいて、わたしは真唯を見返した。

#「真唯」

#　誰よりも似合うステージで、どこにも居場所がなさそうな顔をしている真唯。

#　話さなきゃいけないことは、ほんとはもっともっとたくさんある。

#「待たせちゃって、ごめん。真唯のことずっと振り回してて、ごめん。ずっと勇気も自信もなくて。でもね、わたし変わろうと思った。変わりたかった。今なら真唯と、この先に進めるような気がするから、だから」

#　触れれば崩れ落ちてしまいそうな切なさをたたえた真唯に、指を伸ばす。

#　すべてのきっかけは、親友と恋人の座をかけて始まった、わたしたちの勝負だった。

#　その決着が今、つくんだ。

#「……いつか君は、私のことを抱きしめて、プールに飛び込んでくれたね」

#「……うん」

#「あれは、たとえ私が空を飛べなくなったとしても、君は一緒に悲しみを分かち合ってくれる、って意味だと受け取ったんだ」

#「うん」

#　真唯がどんなに失敗しても、わたしがそばにいて、めてあげる。わたしはそう言いたかった。大切な人とは、楽しいことだけじゃなくて、悲しいことだって、分かち合いたいから。

#「あの言葉は、本当に嬉しかった。あの日から私は、君のことがもっと好きになったんだ。だけど……もし、私と紫陽花と、同時に付き合うと、君がそう言うのなら」

#　目をませながら、真唯がねてくる。

#「それはきっと、本当に大変なことだよ。ふたり分の苦労を、優しい君は背負うことになる。今回の件で思い知ったんだ。私も、面倒な女だ。どうするんだい、君は、これから」

#　どうするか。

#　ふたり分の悲しみを引き受けることになったとき、わたしはどうするのか。

#　それは。

#

#「がんばる」

#

#　わたしの答えは、ひとつも変わらない。

#　軽く目を見開いた真唯に、言い張る。

#「がんばるよ。とにかく、めちゃくちゃがんばって、今よりもっと、強くなる。そうしたら、真唯のこと、ちゃんと支えてあげられるから」

#　――本当はね、考えていたんだよ。この一ヶ月。

#　いつだって、きょうこの日から、新しい自分に手を伸ばすことが許されるのなら。

#　紗月さんみたいに強く。

#　紫陽花さんみたいに優しく。

#　香穂ちゃんみたいに自分の好きに正直に。

#　真唯みたいに輝いた自分に、なりたいんだ――。

#　それはきっと、見上げて首が痛くなるような目標だけどさ。

#　わたしのそばには、四人がいる。『特別』な四人が。

#　そんな子たちと毎日お話していたら、憧れないなんて、ムリだよ。それにね、みんながわたしのことを、認めてもくれるんだ。たまには役に立っているのかなって思えるの。だから、自虐しても、自虐しても、１ミリぐらいは浮かれちゃってさ。

#　お布団の中で思い出すのは、悪いことだけじゃないんだよ。

#　たまたまテストでいい点を取って、紗月さんに褒められたこととか。わたしの言った冗談で紫陽花さんが笑ってくれたこと。香穂ちゃんがペア決めでわたしを選んでくれたこと。真唯が、微笑みかけてくれたこと。嬉しいことだって、いっぱい覚えている。

#　自分で自分を傷つける言葉の陰に隠れて、小さいけれど、自分を認めてあげる言葉だって、浮かんでくるんだ。

#　中学まで引きこもっていた女の子が、友達とステージに立つのなんて、簡単じゃないでしょ。それで少しも自分のことを認めてあげないなんて、それこそムリだよ。

#　だってわたし、がんばってたもん。

#　高校に入ってから、すっごく、がんばってきたんだから。

#『誰にも嫌われたくない』を目指すなんて、苦しいよ。

#　どんなにわたしががんばっても、がんばっても、人からの評価でぜんぶが決まっちゃうなんて、そんなの、本当は嫌だから。

#

#　わたし、変わりたい。

#

#　ねえ、甘織れな子。失敗してくじけることがあっても、そのときはそのとき。ＭＰを充電して、また立ち上がろう。失敗することには慣れているんだ。

#　がんばるからさ、わたし。

#　キミもちょっとはわたしのことを、見直してくれるように、がんばるから。

#「これからも、がんばるから、真唯。言葉じゃなくて、ちゃんと行動で示すからさ」

#「君は」

#　真唯の目が色彩を映す。

#「わたしを、信じて、真唯」

#　真唯の瞳に、光がいた。

#　光はとなって、頰を伝う。

#「わたしは、真唯と、恋人になりたい。親友じゃなくて、れまフレでもなくて、恋人に」

#「れな子」

#「好きだよ、真唯」

#　ああ、と真唯が感嘆の声をらした。

#「まさかこんな日が来るなんて、思わなかった」

#　真唯が、王塚真唯が泣いていた。

#　わたしに決して見せようとはしなかった顔で、ボロボロと涙をこぼしていた。

#「嫌だった……。れな子のことが好きだから、紫陽花にも渡したくなかったんだ……。だけど、私は、格好悪いところを見せたくなくて、私がれな子のためにできることは、もう、それしかないと、思っていたんだ……」

#　紫陽花さんが、真唯の肩を抱く。

#「うん、うん……真唯ちゃん、もう、いいんだよ。ひとりでムリしなくても、いいんだよ」

#　こんな真唯、初めて見る。

#　あまりにも真唯が、かわいらしくて、おしくて。

#　また、泣いちゃいそうだった。

#「そうだよ。真唯はちょっと意地を張りすぎだよ。だから前だって、ひとりで恋人募集パーティーなんて開いちゃってさ。あのときだって、大変だったんだから」

#　わたしと紫陽花さんは、微笑みながら、真唯のことを抱きしめた。

#　スポットライトの下、みんなの目に同じような涙が浮かんでいて、なんだかおかしかった。

#　真唯のことが好きで、紫陽花さんのことが好きで、胸がいっぱいだ。

#　好きの気持ちがあふれてくる。

#　わたしのどこにこんなたくさんの愛が眠っていたんだろう。

#　大好きで、大好きで、泣けてきちゃうなんて。

#「大好きだよ、真唯」

#「私も、好きだ。愛している、れな子」

#　頭をすり寄せる。髪がじゃれて、真唯の匂いがする。

#　ようやく、わたしは本当のことが言えた。

#　これで、真唯とも、恋人同士。

#　また新しい、関係だ。

#「ね、大好きだよ、紫陽花さん」

#「うんっ。私もね、好き。れなちゃんのこと、大好き」

#　と額が触れ合う。紫陽花さんの温かさが伝わってくる。

#「わたしぜったいに、ふたりのことを、幸せにするから。ふたりにお似合いの恋人になれるよう、がんばるから」

#　それはきっと、明らかに調子に乗ったわたしの発言だった。

#　でも『わたしごときがなにを』という内なる声は、今は聞こえない。

#　だってこれは約束じゃない。契約でもない。ただの願いだ。未来への、誓いだ。

#　わたしはそのつもりで、これからを生きていく。きっとものすごく大変なことが、いくらでも起きる。不安要素は数えればきりがない。だいたい、真唯と紫陽花さんを同時にカノジョにして、それでもお似合いの女って、どんなハイパーウーマンだ。

#　それに、わたしはまだよく知らないけど、いずれやってくるってやつはとんでもなく強い感情らしい。勝てないかもしれない。

#　だとしても、そのときはそのとき、また考えればいい。

#　いいんだ。軽率に決めたことで、何回失敗したって。失敗なら慣れてる。

#

#　これからも何度も何度も何度も自分の無力さを突きつけられて。

#　そのたびに死ぬほど悩んで、もがいて、あがいて。

#　それでも、泣きながら前に進んでいけばいい、それだけだから。

#

#　大丈夫。遠い目標だけど、きっと、ムリじゃない。

#　だってわたしは、甘織れな子だから。

#　ふたりが好きになってくれたわたし、なんだから。

#

#

#